苦節の果ての歓び

プロテストを2位タイで合格した29歳が乗り越えてきた挫折の数々

挫折の数が多ければ多いほど、達成したときの歓びは大きくなる——。白木理絵のたどってきた女子プロテスト合格までの日々を振り返ると、そんな感を強くする。右も左も分からないまま飛び込んだゴルフの世界。しかし、頑なに〝変則スウィング〟を守ってきたように、白木理絵が自分が自分であることを貫き通したからこそ、歓びを勝ち取ることができたのであろう。

NON FICTION FILE
ノンフィクションファイル

18番ホールのグリーン上に立った瞬間、白木理絵は後ろを振り返りティグラウンド方向に視線を投げた。幾度となく挫折しそうになりながら、それでも細い糸を手繰り寄せるように紡いで来たプロゴルファーへの夢。その夢がわずか30センチのパットを沈めれば叶うところまでやって来た。

今自分が立っているのは過去と未来の境目。ティグラウンド方向には過去が、そしてグリーン上には未来が、たった30センチの距離を隔てて横たわっている。わずか30センチを埋めるのに10年以上の歳月を費やして来た。このパットを沈めたとき、白木は胸を張って未来に飛び込んで行けるのだ。

振り返って見つめた景色の中に弱音を吐くまいと前だけを向いて突っ走って来た研修生時代の自分の姿が見えた。まるで走馬灯のように甦る苦しかった日々。

「よくここまでゴルフを続けてこれたねぇ」彼女は生まれて初めて自分を褒めた。その瞬間、濃い靄が晴れるように、それまでの苦労がスーッと体から抜け落ち、爽やかな風が吹き抜けた気がした。

万感の思いを込め30センチのパットをカップに沈める。サングラスに隠した双の瞳にこみ上げた涙がこぼれないよう、彼女は思わず天を仰いだ。雨上がりの鈍色の空を見上げ、彼女は声を出さずに静かに泣いた。

盛夏8月。滋賀県の名神八日市で行われた国内女子プロテスト最終戦。ジュニア時代から注目を集め、すでにプロの試合で活躍している上原彩子、横峯さくら、そして実技免除で筆記試験に臨んだ宮里藍ら、スター選手に混じって29歳の白木の姿があった。プロテスト6度目の挑戦にして堂々2位タイ（1位上原、2位タイは横峯と同じ）での合格。彼女がたどったプロへの道のりは、まさに苦節と呼ぶに相応しい。

初秋の気配が漂い始めた都内のホテル。ルーキーキャンプ（新人研修として日本女子プロ選手権で裏方を体験する）を終えたばかりの白木に会った。小麦色の肌に白いブラウスが映えていた。30歳を目前にした彼女は来し方を振り返り、饒舌に語り出す。

＊

愛知県豊田市、平凡なサラリーマン家庭で育った理絵の小さい頃の夢はプロテニスプレーヤー。中学では軟式テニス部に所属し、朝から晩までラケットを振った。熱血少女の秘かな夢。それは海外へのテニス留学。プロになるためにはそれしかないと信じていた。

だが留学したいと打ち明けた娘に両親は「そんなお金、うちのどこにあるの？」と一蹴。かわりに勧められたのがゴルフだった。

「これなんてどうだ？　一獲千金だぞ」父親が掲げたゴルフスクールの広告を今でも理絵は鮮明に覚えている。しかし一旦はクラブを握ってはみたものの、テニスと違ってゴルフは性に合わない。それでも「テニスじゃ将来生活できない」と言う親の説得に応じ、高校2年の頃から理絵の思いは漠然とプロゴルファーへと向いて行った。

白木理絵

■文・川野美佳（ゴルフライター）
■写真・姉崎正

高校時代は自宅のある豊田から学校まで片道20キロの道のりを、いわゆるババチャリで片道1時間かけて通った。朝4時に起きて登校途中にトレーニングジムに寄り、河川敷で打球練習。その足で部活の朝練に出て授業を受け、帰りはそれと逆の順番で10キロの道のりを家路につく。練習に熱中し過ぎて家にたどり着くのは夜中の12時を過ぎることも度々だった。

週末はゴルフバッグを担ぎ、電車とバスを乗り継いでキャディのバイトをするコースに通った。バイトを終え夜になってもコースに居残りヘッドライトをつけて真夜中までパットを打つ。夜中まで練習するから必然的に土曜の夜は家に帰れない。スタートホールの横にある売店で仮眠を取り、朝になるとまたキャディをやった。

教えてくれる人は誰もいない。雑誌が唯一のゴルフの先生。もともと軟式テニスをやっていたため、テークバックでフェースを開き、右手を使ってドライブをかけ背中から回してフックを打つ変則スウィング。だが、誰に何と言われようと理絵は自己流を貫いた。そんな努力の甲斐があって、独学ながら高校を卒業する頃には70台が出るようになっていた。

しかし卒業後、「プロになる」という志だけは高いのだが、どうやればプロになれるのか、その方法が皆目わからず悶々とした日々を送る。両親がゴルフをするわけでもなく、知り合いにもゴルフ界に縁のある人は皆無。

研修生としてゴルフ場に入るには入ったが、プロテストの受け方さえわからず、慣れない人付き合いに傷つき、精神状態は最悪。そんなとき両親との間に衝突が起きた。

「いっこうにプロになる気配がない私に親が、いったい何をやっているの？　と言い出したんです。両親はゴルフのこと、全然わかりませんから。私としては親に心配をかけまいとして、悩みも打ち明けずにいたのに、それが裏目に出てしまって……」

理絵は何もかもが嫌になり、突然家を飛び出すことに。

「温泉で女将でもやろうかな、と思って家を出たんです（笑）。ゴルフバッグ1つ持って」

車を走らせたどり着いたのは飛騨高山。そこでふらりと入った練習場でゴルフの腕を見込まれ、「ワンポイントレッスンやってくれないかな」と頼まれ快諾。家出をしてもやはりゴルフからは離れられなかった。

レッスン客の家に泊めてもらいながら1カ月後、彼女は頭を冷やし家に戻った。

帰って来た娘の前で母はただただ泣くばかり。「あなたの気持ちがわからずごめんなさい」と玄関

「ルーキーキャンプでは多くの裏方さんに支えられているのがとてもよく理解できました」

で土下座をする母。それが彼女には耐えられなかった。勝手な言い分だが「親だったら、何で娘をぶたないの？　叩かないの？」と心の中で毒づいた。

父は静かに笑顔さえ浮かべながらこう言った「久し振りやな。お帰り。どこを旅してきたんだ？」

「お父さんにいくら迷惑をかけてもいい。お母さんだけは悲しませないでくれ」父のセリフに胸がつまった。

「私が家に居たら家族に迷惑をかける。私がゴルフをやっている限り、両親が安心することはできない。やはり私の居場所はここじゃない」

忘れもしない阪神大震災当日。理絵は2度目の家出を決行する。

初めて〝さくらパパ〟が「理に適っている」と認めてくれた変則スウィング

一生懸命にやればやるほど関係がぎくしゃくする。理絵と両親との関係がまさにそれだった。本人は心配をかけまいと懸命に取り繕うのだが、両親は本心をさらけ出さない娘に焦れ、言わずもがなのセリフを投げる。

2度目の家出をした理絵の行き先は兵庫県のアークよかわゴルフ倶楽部。研修生を募集していたことを知り、その足で飛び込み、実技テストと面接に合格。本腰を入れてプロテストに挑戦することになった。

ゴルフ場から出る12万円の給料のうち7万円は貯金に回した。若いみそらで服も買わずコツコツ貯めたのは、全て将来ツアーで転戦の経費にするため。健気な努力。だが、はじめてのプロテストを目前にして理絵を襲った悲劇が彼女の夢を粉々に打ち砕いた。

持ち物はアルバム以外すべてを裏の畑で燃やした。妹の部屋に「お父さんとお母さんをよろしく」という置き手紙を残し、理絵はひとり家を出た。

肩こりがひどいと思って病院の門を叩くと頸椎（けいつい）ヘルニアが判明。その日のうちに入院を余儀なくされ、医師に「手術してゴルフを続けるか？　手術をせずゴルフをやめるか？」究極の選択を迫られた。

結局手術は回避したものの、だましだましプレーしたプロテストに失敗。実はその頃、本戦の前に受けた2次テストでパターのヘッドがポトリと落ちるという〝事件〟に見舞われ、その場凌ぎに借りたレンタルパターの金属音が勘にさわり、パターイップスにも陥っていた。

最終テストに落ちたその日、理絵はゴルフ界からすっぱりと足を洗う決意をする。

「一生懸命やって病気になった。もういいだろう。自分はこれで燃焼し尽くした」

ゴルフ場を辞めた2日後、呉服

屋で働く理絵の姿があった。白木理絵、21歳直前の晩夏だった。

それから4年間、理絵は新たな目標に向かって歩むことになる。

「呉服屋は1年で辞め、整体師を目指して大学に行くための受験勉強を始めたんです」

しかし2年が過ぎ、3年が過ぎても学校には受からず、やっと4年目で専門学校に入学できる目処が立ったとき、ふと理絵は自らの心の中に燻っていた本当の気持ちに気づく。

「このまま学校に行けば整体師になってしまう。でも本当に自分はそれでいいのだろうか？　やり残したことはなかったのか？」

このとき理絵は心の奥に押し込め、気づかぬふりをしていたゴルフへの情熱を再認識するのだった。思い立ったら即実行。さっそく理絵は研修生に舞い戻り、再びゴルフを志すのである。

しかし4年間のブランクはいかにも大きかった。プロテストは00年から昨年まで連続4回で不合格。今年は「今回ダメならパラオでダイビングのインストラクターになろう」と背水の陣で挑んでいた。

テストに落ち続け、挫折しそうになっていた彼女に、1年前、1つの出会いがあった。それは横峯さくらの姉・留衣と父の良郎さんとの出会いだった。横峯姉妹のコーチでもある良郎さんは昨年のプロテストの会場で理絵にこう言ったのだ。

「理絵のゴルフは理屈に合ってるよ。理に適っている」

それまでさんざん人におかしいと言われてきた変則スウィング。それを〝さくらパパ〟は「理屈に合っている」と言ってくれたのだ。そして良郎さんは嬉々として「もし理絵がトーナメントに出たら」という話を、細い目をさらに細めながら語ってくれたのだった。

それを聞いた理絵は涙が止まらなかった。やっと自分の理解者に出会えた喜び。テストに落ちたら諦めようと思っていた彼女がもう1年頑張ってみようと決意した瞬間だった。そして「鹿屋において」という良郎さんの言葉に甘え、理絵は昨年のオフシーズン、姉妹が育った手造りの練習場がある鹿児島を訪ねた。

鹿屋では自分より10歳も20歳も年下のジュニアたちと一緒に気持ちの良い汗を流した。手作りの練習場で、筋トレや箒や竹を使ったユニークな練習に夢中になった。ジュニアたちのかもし出す熱気、そしてキラキラ光る瞳の輝きに圧倒された。ゴルフを心の底から楽しんでいる子供たちの姿に理絵は感動すら覚えていた。

「生まれて初めて、私もゴルフが楽しい、って思えたんです」

義理や意地でゴルフをするのではなく、心の底から楽しみながら誰のためでもなくただ自分のためにゴルフをする。それは高校2年で本格的にゴルフを始めて以来、理絵が初めて体験する感覚だった。

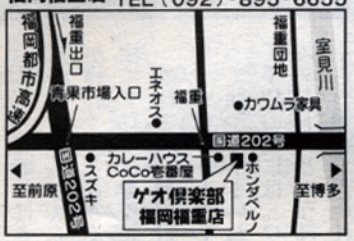
そして臨んだ今年のプロテスト、

NON FICTION FILE

中古クラブ専門店
買取　販売
最新モデル・人気モデル在庫豊富
ゲオ倶楽部

千葉県　県内最大級 試打室完備！
柏　店　千葉県柏市東台本町5-11
TEL（04）-7166-0589

福岡県　県内最大級 試打室完備！
福岡福重店　福岡県福岡市西区福重1-2-28
TEL（092）-895-6655



北海道　Doki-Doki 函館店インショップ
函館店　北海道函館市昭和3-24-18
TEL（0168）-62-3960

埼玉県　Doki-Doki 熊谷店インショップ
熊谷店　埼玉県熊谷市大字原島1247-1
TEL（048）-520-3113

クラブが合わなければ買取保証致します。
当　日 以内税込価格の⇒ 95％
3　日 以内税込価格の⇒ 90％
1週間 以内税込価格の⇒ 85％
2週間 以内税込価格の⇒ 80％
1ヶ月 以内税込価格の⇒ 70％

（株）ゲオアール　愛知県春日井市高山町1-3-10
本社 TEL(0568)-31-4300

横峯父娘との出会いでゴルフの本当の面白さを知った

NON FICTION FILE

練習ラウンドからさくらと一緒だった。年は10離れているが、実績ではさくらの方がずっと上。テスト2日目が終わったときさくらは理絵にグローブを差し出した。

「理絵さん、最終日は私とマッチプレーしていると思って回って下さいね」

手袋の裏には〝ワンマイスタート〟という言葉がさくらの筆跡で書かれていた。

「ワンマイスタートには、出だしでボギーを叩いても1つマイナスしたパースタートだと思えばいい、という意味が込められているんです。そう思えば最初につまずいても、まだまだ行けるという気持ちになれるでしょ?」(白木)

最終日の朝、緊張のため朝早く目が覚めてしまった理絵は、〝さくらパパ〟がこれまた手作りをした寝泊まりできる移動用のバンを訪ねて朝ご飯をごちそうになった。

「さくらはまだぐっすり眠っていました。こっちは緊張してご飯ものどを通らないのに、さくらはぎりぎりまで寝て、起きた途端ご飯を軽く2膳平らげた。さすが大物! と思いました(笑)」

「さくらはそうだなぁ、寝るかゴルフしているか食べてるか、そのどれかだな」良郎さんがのんきに笑って見せた。

最終日は練習場でさくらのショットを眺めながら、緊張で震えが止まらなくなった。が、ティグラウンドに立った瞬間、不思議なことにスッと震えが収まった。

「ここまで来たら、ただ自分のゴルフをするだけだ、って思ったんです。コツコツと自分のペースを重ねて行ったら、あとで結果がついてくるかな、って……」

そして最終ホール、30センチのパットを沈め、さくらと並ぶ2位タイの好成績で合格した直後、理絵は真っ先に良郎さんを探した。「おめでとう」と差し出された〝さくらパパ〟の右手をしっかりと握り返した。頑張り屋の彼女には、居るだけでホッとする穏やかな雰囲気の良郎さんの存在が心地好い。

もちろん彼だけでなく、これまで応援してくれたすべての人に感謝したいと理絵は言う。中でも本当なら彼女と一緒にプロテストを受験しているはずだったひとりの友人に「ありがとう」を伝えたい。

研修生生活10年で今年初めて2次予選をクリアし、本戦に進めるはずだった太田さゆりさんがその人。彼女はプロテスト直前、運転中に対向車線から飛び出して来た車に衝突され貴い命を落としている。理絵はさゆりさんの写真をズボンのポケットに忍ばせプロテストを戦った。友と一緒に戦い、一緒にテストを通った。

「きっと天国の彼女が私の背中を押してくれたんですね」

再び戦う勇気を与えてくれたさくらパパ、苦楽を分かち合った友人、その他数え切れない人たちの支えがあって、理絵は30歳になる一歩手前でプロになった。

「目標ですか? トーナメントに出たいとか勝ちたいとか、そんな目標はないんです。ただコツコツと自分のペースを守って1球1球を大切にしたい。それだけです」

大それた夢はないと理絵は言う。だが何かを予感させる29歳のルーキーの誕生。変則スウィングの元気娘がもしトーナメントを賑わすことになれば、それはそれで楽しいことになりそうだ。(文中敬称略)

かわのみか・東京生まれ。通訳のかたわらゴルフ雑誌を中心に執筆活動を行い、翻訳も手がける。主な訳書に「ゴルフ54ビジョン」「タイガー・ウッズ/私のゴルフ論」「ブッチ・ハーモンの勝者のゴルフ」ほか。